

令和5年度

一般入学試験A日程 学科試験問題

国 語

1. 試験時間は、2教科で120分間です。
2. 問題は、この冊子の1～20ページにあります。解答用紙は別に2枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

植草学園大学 保健医療学部

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えなさい。

一九五六（昭和三一）年七月三十一日、日本初の集約的な大規模アニメスタジオ・東映動画は発足した。母体となったのは、政岡憲三が立ち上げに関わった日動映画社である。当時の日動は短編アニメーション専門スタジオで、スタッフは三十数名だった。東映動画は長編アニメ制作を目指してスタッフを増員し、設立三年後には約二七〇名になった。

東映動画の発足は、デイズニーばりの長編アニメを目指す以前に、エンタテインメントとしてのアニメを商業的に制作し、そのための大規模スタジオを維持し、スタッフを雇用し、作品を作り継いでいくことを前提にした点に意味がある。しかもそれは、まだまだ不確実要素が大きかった当時の国内アニメ市場をつくりながら、ということでもあった。

これは、日本のアニメ界が「近世」から「近代」に入ったと表現できる。

一般的な年代区分でいう古代、中世、近世、近代、そして現代は、文化の成熟、国家や社会制度の成立、産業や科学技術の発展などで線引きされる。日本史では、海外の制度や技術の導入が年代区分の材料となる場合もある。

アニメーションの歴史では、止まっている絵をどうやって動いて見せているかが最大のポイントである。そうすると、日本では、絵巻物などの時代は「古代」、江戸時代の写し絵のように西洋伝来の技術を参考にしながら、静止画をスクリーン上で動かそうとしていた時代は「中世」にあたる。欧米のアニメーションを手さぐりで研究し、何とか国産アニメーションを実現してから「近世」に入ったが、技術的には欧米に及ばず、また市場は零細なままで、産業としても未発達だった。

ここで東映動画は、デイズニー・スタジオを模して最新式の撮影機材を導入し、数百名のスタッフを集めて年一本の長編アニメ制作を目指したのである。それは明治維新による文明開化に匹敵し、日本のアニメが「近代」に入ったことを印象づける、<sup>A</sup>重要な転換点であった。

ただ、東映動画は最初から長編アニメ制作だけに突き進んでいたわけではない。

発足した東映動画には、いくつかの異なる人脈が<sup>A</sup>コンザイしていた。一つが母体になった日動映画で、ここは敗戦直後から短編アニメーションを制作してきた。日動には政岡憲三の門下生だけではなく、東宝でアニメーション制作に従事していたスタッフが混じっていた。さらには、満洲映画協会（満映）の元スタッフも入り込んでいた。満映では、劇映画やニュ

ース映画などのほか、戦時中はアニメーションも制作していた。

東映動画発足前、東映本体の一部局だった東映教育映画部は、日動に短編アニメーション制作を「ハッチュウシ」<sup>イ</sup>、その実力を確かめた。当時、教育映画部では子ども向けの短編映画を制作し、一定の成果を出していた。

つまり、趨勢は短編だったのである。すでに「デイズニー」がアニメーションの未来像を指し示してはいたが、それを踏襲するには、人的資源、持ち得る技術水準、資金調達、マーケット、あらゆる面から時期「ショウソウだ」と考えられていた。

しかも、当時のアニメーション事情をあらためて見ると、アニメーションの未来像を描いていたのは「デイズニー」だけではなかった。

長編でいうと、『白雪姫』以前に、アメリカのフライシャー・スタジオ制作の長編『ガリバー旅行記』（一九三九年、日本公開一九四八年四月一三日）、ソビエト連邦の長編『せむしの仔馬』<sup>こうま</sup>（一九四七年、日本公開一九四九年三月二五日）などが公開されていた。前者はJ・スウィフト原作の社会風刺が強い作品、後者は民族色が織り込まれた作風で、いずれも「デイズニー」作品がもつ娯楽性とは異なる。

特に、一九五五年三月に国内公開されたフランスの長編『やぶにらみの暴君』（P・グリモー監督、一九五二年、一九八〇年に監督自身による完全版『王と鳥』完成）は、子ども向けから脱却した長編として重要である。独裁的な王が治める小国を舞台に、羊飼いの娘と煙突掃除人の青年が追手を逃れる中で、次第に宮殿と王国の真相が見えてくる、というストーリーである。理想と現実、抑圧と解放、それらが絡み合いながら新たな価値観が浮かび上がってくる構成は、ファンタジーやメルヘンを志向していた当時の長編アニメーションにはない、新しい可能性を追求したものだ。宮崎駿や高畑勲など、本作から受けた影響を語るアニメ監督は数多い。

こうした状況が、東映動画企画陣にどの程度の影響を与えていたかは明らかでない。ただ、「デイズニー」を目指すとは、長編、ファンタジー、ミュージカル、動物キャラクターによるメルヘンなどの要素が盛り込まれることになる。それはいかに「アニメーションらしい表現を追求するよう」<sup>B</sup>でいて、実はその可能性を「一方だけに収束しかねない、ある種の危険性をも孕んでいた」。

やや混沌とした設立前後の東映動画が、結局長編アニメを目指すに至ったキーマンの一人が、東映社長の大川博<sup>おかわひろし</sup>（一八

九六（一九七一）だった。

彼は中央大学から鉄道省に入り、主に経理畑の事務官として歩んで、東急グループの総帥・五島慶太ごとうけいたにスカウトされる形で、一九五一（昭和二六）年四月一日設立の東映初代社長に就いた。当時も今も、毀誉褒貶きよほうへんの激しい経営者である。

巨額の赤字を抱えていた発足当初の東映の制作陣に対して、大川は予算即決算主義、つまり予算がそのまま決算になる方針を厳守させた。<sup>エ</sup>ホウマンホウマンな金遣いが常態化していた映画制作現場を「金で足りない部分は、諸君の創意工夫と熱でおぎなってくれ給え」と突き放した（大川博『この一番』東京書房、一九五九年）。また、東映作品だけを上映する専門館の増設や二本立て興行の導入などで収益性を向上させ、設立五年後には東宝や松竹なども抜いて、興行収益トップの座を獲得した。現場からは嫌われたが、経理屋ならではの割り切りと結果主義で、大川は東映を立ち直らせたのである。

そんな彼が、アニメーション参入にどれほど真剣だったかは、本人の発言や回想からははっきりしない。ただ、彼は自社映画を海外輸出したい野望は相当に持っていた。当時は黒澤明くろさわあきら監督の『羅生門』（一九五〇年）がヴェネツィア国際映画祭で最高賞の金獅子賞を受賞し、日本映画の海外進出に注目が集まっていた。

そこで、劇映画に比べてアニメーションは無国籍性が強く、と、大川は考えていたのである。

また、ディズニーの長編以外にも、子ども向けの娯楽映画が数多く制作されはじめ、これらのヒットを見るにつけ、映画観客としての子どもの可能性に大川は気づいていた。

さらに、当時は映画人から見下されていたテレビの将来性にも大川は着目し、「テレビ用のコマーションル動画は現在小規模な工場でつくられている。これはどうしても設備の完備した大きなスタジオでつくられなければ、将来の需要を満たすことが出来ない」（『キネマ旬報』一九五七年一月下旬号）と語り、これが東映動画を設立した動機だと力説した。

それでも、長編か短編かとなると、大川博の意向が強く働いた形跡は見えない。当時の東映内で、大川のいう海外輸出を前提とするなら、ディズニーばりのフルカラー長編でなければダメだという意見と、十分な技術をもってすれば短編でも世界に通用する作品を作り得るという意見が対立していた。

結果として、東映動画としての第一作は、母体となった日動映画のスタッフが手がけた短編アニメーション『こねこのら

くがき』(一九五七年)になった。一方、並行して制作が続けられていたのが『白蛇伝』<sup>はくじやでん</sup>で、これは東映動画初の長編アニメとして、翌一九五八年九月に完成、一〇月二二日に公開された。

『白蛇伝』は、少年時代に白蛇を助けた青年と、その白蛇の化身である女性との恋物語である。青年は、女性が白蛇の化身だと気づいていない。すれ違いと切なさが漂う、従来の子ども向けアニメとは趣を異にする意欲作である。その完成への道筋は相当に紆余曲折しており、残された資料や関係者の証言を集めても、その全貌は明らかではない。企画が動き出したのは東映動画発足前なので、完成までに一年以上を要している。

東映動画は『白蛇伝』公開までに『こねこのらくがき』を含む四本の短編アニメーションを完成させているから、やはり本流は短編だった。長編は、『白蛇伝』のプランは動きつつも、そもそも自分たちで長編アニメが作れるのかという根本的なところで試行錯誤があった。それは、ストーリーからキャラクター、作画、編集まで、全般にわたる。一〇分程度の短編しか制作経験がない者が八〇分の長編を作るとなると、木造一戸建て専門の大工がいきなり<sup>オ</sup>テツキンコンクリート五階建て商業ビルを造るようなものである。

事実、『白蛇伝』の制作途上、全編を三部構成にして、第一部のラストシーンでもエンドマークを出せるようにとの方針が出ていた。これは、仮に長編としての完成を断念せざるを得なくなっても、出来たところまで短編として公開できるような非常手段を打ったとも考えられる。

それでも、公開された『白蛇伝』は、日本初の「総天然色漫画映画」として好意的に迎えられた。また、宿願の海外での興行にも供して、約九万五〇〇〇ドルの収益を上げたといわれる。現在の日本は世界的に見ても屈指の長編アニメ大国だが、<sup>E</sup>その出発点は『白蛇伝』だった。

(津堅信之『日本アニメ史』より)

\*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア～オのカタカナを、漢字で書きなさい。

問2 傍線部A「重要な転換点」のきっかけとなったものは何ですか。本文中からその答えに該当する部分を十字で抜き出しなさい。

問3 傍線部B「ある種の危険性をも孕んでいた」とは、本文中ではどのような意味として使われていますか。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 膨大な資金を使って映画を作るため、見る側が受け入れなかったら損害を出すことになってしまう。
- 2 メルヘンの要素を主に追求すると、新たな価値観を浮かび上がらせる可能性を失わせることになる。
- 3 ファンタジー、ミュージカル、キャラクター等をアニメ化すると、著作権の問題が出てきかねない。
- 4 デイズニー的な作品ばかりを作っていくと、二番煎じのような作品だらけになる可能性も出てくる。

問4 傍線部C「興行収益トップの座を獲得した」とありますが、トップの座を獲得できた理由について、最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 長編、ファンタジー、ミュージカル、動物キャラクターによるメルヘンなどの要素を取り入れたから。
- 2 デイズニー映画の手法を取り入れ、子どもに人気のキャラクターやアニメーションを作っていたから。
- 3 特定の会社の独占上映館を増設したり、二本立てで放映したり等の興業上の工夫をしていたから。
- 4 最新式の撮影機材を導入し、数百名のスタッフを集めて年一本の長編アニメ制作を目指したから。

問5 空欄Dに入る文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 黒澤明監督の『羅生門』の成功に続くことができる
- 2 戦後日本の復興に夢や希望を持たせる可能性がある
- 3 大人も子どもも楽しめるため、収益性が高い
- 4 海外に輸出するコンテンツとして有利ではないか

問6 傍線部E「その出発点は『白蛇伝』だった」とありますが、筆者がこれを出発点と判断する理由について、百字以内で説明しなさい。ただし、次の語を必ず使用しなさい。

使用する語 (試行錯誤・好意的・収益)

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜5）に答えなさい。

人生を終えるのも、もう後ほんの少しとなって来ると、誰でも考えることかもしれないが、自分の一生は果たしてこれで良かったのだろうか、という疑いが、時々心に浮かぶようだ。そんな迷いなど、若い時は口にするのも恥ずかしくて友だちにも言わなかったものだが、さすがに残り時間も僅かになってくると、そんなことを気にしてもいられなくなるのだろう。とにかく後数年で死ぬ前に、一応答えを出しておかねばならないのだ。

いろいろ考えて、たいていの人が、どうやら自分<sup>A</sup>を納得させるだけの答えらしいものを見つけ出す。どうやって納得するかというと、つまり謙虚になるのである。自分が操作可能な程度の頭や体力だったら、つまりはこの程度の働きをするのがやっとだった。自分はそれに従ったのであって、その意味で言えば、オリンピック選手が世界新記録を立てて引退したようなものだ、と思いかけるのである。

しかし無駄な比較というものも、簡単には払拭できない。誰それさんのご主人の履歴は、世間的に見ても立派だった。県知事になられた。一時は〇〇大学の学長さんも務めた。会社の社長だったこともある、などと無責任な嫉妬まじりの噂も広まる。その結果、つまり簡単に言うと、自分の一生は取るに足らないものだった、という無力感に捉えられる人は、昔からいたのである。

昔の日本の男には、今のようにいわゆる社会的な出世をしなくても、戦争の時、前線で戦功を立てるという可能性があった。「爆弾三勇士」は、一九三一年の上海事変の時、廟行鎮の戦闘で、三人の工兵隊一等兵が敵の鉄条網爆破のために、大きな爆弾の筒を抱えて突っ込んだという逸話である。この話は本来は、爆破後に帰投するはずだったが失敗して爆死したのだという。しかし軍部は、これを計画的な覚悟の攻撃であるとし、その後当時の日本のマスコミが、「悲壮忠烈の極」などと積極的にキャンペーンを繰り返した結果、軍事美談となったと記録されているが、当時子供だった私でさえよく記憶している有名な話であった。

今の社会にも簡単に他人に知られる「出世」はあるのだろうか。代議士に立って当選するとか、科学的な業績においてノーベル賞を受けるとかすれば、国民の総てに知られることになる。



しかし大会社の社長になるだけでは、「ア知る人ぞ知る」程度で終わることは多い。その会社の研究部門にいる人が、後々人々のためになる製品を作り出してくれても、多くの国民はその事実を知らないまま、製品に僅かなお金を払うだけで恩恵を受けられる。

しかし考えてみると、どんな生活でも、刻々、その人がすべき事はあるので、その行為がさまざま人の命や安全や幸福を支えている。私たちに食料を供給したり、輸送に係わったりしてくる人が、私たちの平凡な日常生活の安心の元なのである。

この頃私は、今、この瞬間に自分が何をすべきか、神の（天の）命令があると思うようになった。別に天から声が聞えるというような大したことではない。ただ、今日は誰それさんが見えるから、私が頂いていたすばらしいお魚の干物のうちの数枚を分けよう、とか、飼っている二匹の猫には夜も充分水が飲めるようにしておいてやらねば、という程度のことである。嵐が近づけば、私は戸締まりを確認し、植木鉢が落ちて割れないようにする。つまらないことだが、やはりそれは安全のために仕方なくすることなのだ。

こういう感じ方は、別に何かに責任のある人の重責というわけではない。今、この瞬間、自分が守るべき命の総てに対して責を負っているのである。

とすると、Bどの人の存在の価値も同じということになる。歩くこともできない病人は、ただ誰かに面倒をみてもらうだけだと思いがちだが、実は介護する人に生きる目的を与えている。昔、重度の心身障害者をもつ家族の話を聞いた。その一家にとって十代の障害者の息子は大きな重荷だった。一人前とは言えない兄を持つ妹たちが荒れて、ヒステリーを起こす場面もあった。

しかしこの兄が三十歳を少し過ぎて亡くなった。誰もが、あの一家からは、これで苦勞が取り除かれたと感じた。しかし葬儀も終わって一家だけになった時、彼らは途方もない空しさを感じた。重荷が取り除かれたのではない。中心にあった光が消えたように感じた。つまり彼らは、生きる目的になっていく力、中心に向かっていた結束力の温かさを失ったように感じた。本当は誰にも必ず、その人がなすべき仕事がある。多くの場合、小さな仕事だ。人は一刻一刻その命令を感じているはずだ。しかし気がつかない時もあれば、わざと気をつけたくない気分の時もある。

私は面倒なことを、できるだけさぼりたい。猫の水呑みに清潔な水を満たして来なかった、ということに気づくだけでも少し自分にうんざりして、この真夜中近くにわざわざ階下まで下りて行って、水を換えてやらなくてもいいだろう、まさか朝までに命の危険はないだろう、などと考える。しかし同時に、猫には餌よりも水が大切だと書いてあった新聞記事を思い出す。餌は一晚なくてもどうとすることはないが、水を飲ませないと、腎臓の弱いスコティッシュフォールド種の猫にとっては望ましくない病気を引き起こす、という。すると仕方なく私は起き出して、廊下に行く。どうせやるなら清潔な水がいからと水呑み用の器を洗い、きれいな水を満たして、「ハイ、直ちゃん、おみじゅ」と、猫用幼児語までを使ってしまう。これもあまり好きではない行動なのに……である。

つまり一刻一刻の私の行為は、かなり愚かしいことではあっても、私にはすべきことがあるということだ。猫の面倒だけではない。普段はあまりさわらない平面に手が行けば、そこが埃でざらざらしている日もある。イ<sup>イ</sup>煩い姑がいるわけではなく、そのままにしておいても誰も文句を言う人はいないのに、やはりその瞬間から私には「ちよつと拭いておく」という仕事が発生する。

毎日の生活というものは、誰にとってもそんな程度のことの連続だろう。しかし時にはもう少し重要な仕事もある。家族の誰かが「熱っぽい」と言つて、家<sup>カ</sup>に買い置き<sup>カ</sup>の風邪薬がなければ、「今晩のうちに、薬屋で買ってきておいて飲ませよう」ということになる。掛かりつけ医の往診を頼むほどでもないが、風邪は早いうちに手を打った方がいいからだ。

世の中にはどうしたらいいかわからないこともある。しかし古来わかっていることも多い。わかっていることをしないのは、かなりの「暴挙」である。つまり人の善意とか社会のしきたりには従わないという態度を明示したら、その人の行為は、かなりの逆風に吹きさらされることになる。だから世間の多くの人は、良識に従い、自分の好む生活をしない。その方が<sup>ウ</sup>無難だからである。

私も、時々人と違うと思うことをしている。私はそういう時、できるだけこつそりと、社会の風に従わない。それで辛うじて自分を失わない、と思えることもあるし、本当はそんなことを口実に会合や葬儀に出席せず、体を休めている場合も多い。

自分に高熱があっても、社会的に重要だと思われる人の告別式には出かける知人もいる。それが原因で病気が重くな

って死んでも、誰も責任をとってくれないのに、である。もちろん他人の心は本当にはわからないから、たかが告別式の出席か欠席かで、何一つ推し量ることはできない。

しかし最近、会社が長時間労働をさせるとか、上役がセクハラをするとかで、自殺したり病気になったりするような人がいると、そんなに嫌ならなぜもっと早く会社をやめなかったのだろうか、と私は思う。せっかく見つけた職場を簡単に見捨てていいわけでもないが、死ぬほど辛い状況だったのなら、やめた方がよかったのである。もちろん私たち年長者は、若い世代に「世の中は全て辛抱よ。辛抱しなくていい仕事なんか無い」と説教する場合も多いのだが、それでもその環境で働くのが死ぬより辛いかどうかは、当人の判断以外にない。

今の日本の社会的状況は、何でもできる。職場を辞めても、仕事の内容に好き嫌いを言わなければ、何とか生きて行けるはずだ。自分を生かすも殺すも、自分の判断とその結果の行動による。

社会主義国家で暮らす体験を私は知らなくて済んでいるのだが、日本のように、生来の仕事から恋愛まで自由に選べる生活もまた恐ろしいのである。責任は全部自分にかかってくる。昔の結婚は親が決める場合が多かった。だから恋愛感情は生まれなくても、相手が常識的な世界観の持ち主で、一生おだやかに暮らせた例も多かったと言えるのかもしれない。

しかし今日一日の生き方を決めるのはやはり自分なのだ。そして今日一日が幸せで、明日も同じようにおだやかなものであり、それが長く続けば、その人の生涯は成功だったと言える。選ぶのも当人、結果を判断するのも当人だとすると、判定は公正のようだが、不満の持つて行き所もなくなる。

一生は、今日一日の積み重ねだ。だから、今からでも不満は修復できるとも言えるし、<sup>D</sup>その全責任が自分にかかってくる恐ろしさにも気づかなければならない。

(曾野綾子『人間の義務』より)

\*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア～ウの本文における意味として最も適するものを、それぞれ後の1～4の中から一つ選びなさい。

ア 知る人ぞ知る

- 1 漠然とではあっても多くの人に知られている。
- 2 一部の人にはその真価をよく理解されている。
- 3 直接に接触のある人だけによく知られている。
- 4 知ろうと努力する人にはよく理解されている。

イ 煩い

- 1 音が強かったり多かったりして煩わしい。
- 2 よく気持ちが行き届いていて申し分ない。
- 3 扱いにいちいち手間がかかり厄介である。
- 4 あれこれしつこく注意されやり切れない。

ウ 無難

- 1 事故の危険や災難がない。
- 2 優れていないが悪くない。
- 3 無事であることが正しい。
- 4 特色はないが優れている。

問2 傍線A「自分を納得させるだけの答え」とありますが、その答えに対する問いの部分<sup>、</sup>を本文から二十五字以内で抜き出し、その最初と最後のそれぞれ五字を答えなさい。

問3 傍線部B「どの人の存在の価値も同じ」とありますが、筆者の考える人の存在価値<sup>、</sup>を説明するものとして最も適するものを、次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- 1 なすべき仕事をするのでさまざまな人の命や安全や幸福を支えていること。
- 2 重荷と思えるようなことでも苦労ではなくて生きる目的だと信じていること。
- 3 神の命令に従って日々の雑事をこなすことで困っている人を支えていること。
- 4 小さな仕事でも面倒がらずにすることと人としての責任を果たしていること。

問4 傍線C「できるだけこつそりと」とありますが、筆者がそうする理由の説明として最も適するものを、次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- 1 自分の行為には自信を持っているが、社会の良識に反しているので、隠れてやらなければ罰せられるから。
- 2 自分が思うとおりにやりたいが、社会の良識に反しているので、予想される非難は避ける方が賢明だから。
- 3 人と違うことをすることで日頃の不満を晴らしたいが、それが原因で暴力的な人と判断されたくないから。
- 4 人の善意や社会のしきたりに従わないのはどう考えても悪いことなので、周囲の人に知られては困るから。

問5 傍線部D「その全責任が自分にかかってくる恐ろしさにも気づかなければならない」とありますが、筆者はなぜそう考えるのかを、本文の趣旨をふまえて百字以内で説明しなさい。ただし、次の語を必ず使用しなさい。

使用する語 (選択・自由・生き方・責任・転嫁)

第三問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

「パパあ」最近のことだが、十歳の長女の由希が私に言った。「Aパパは、どうして、本など書くような人間になったの」私はそう言われてウームとうなり、それからしばらくして、大きなためいきをついた。

どうして、この日本語のどうしてが問題だ。これだけの文章を読んだ人間のある者は、このどうしてを単純になぜという言葉で置換えることで満足するだろう。そうして、由希が、私になぜ作家になったのか、その理由を知りたいのだと思うだろう。また、他のどうしてを、こうしてとかそうしてとかの副詞と対にして頭にしまっている人間は、それを、どうやってという方法を質問する言葉で置換えるかも知れない。日本語の小さな辞書には、この言葉について、この二つの用法しか書かれておらぬが、けしからんことだ。大きな辞書には、さらに、どうしてそのようなことがありえようか、という反語的用法の時の、絶対的な打消しの用法がつけくわえられている。

だが、由希のその時の声を聞いたもの、その言葉を口にする表情を見ていたものは、よもや、そのような解釈をすまい。お前は私がなぜ作家になったという理由を知りたいのでもなく、また、どのような勉強をし、努力をして作家になったかを知りたいのでもない。お前は、どうしてを遺憾の念を表わす言葉として、ここで使っているのだ。

お前は、私が物を書くような人間になり、そのため、他の子供の父親のように遊んでくれることも少なくなり、そればかりか、いい表現が頭に浮かばぬからと言っては、イライラと腹立ちっぽくも気むずかしい人間となったことを、うらみに思っているだけなのだ。

どうしての疑問副詞の働きは、そこにはもはやない。私がお前のどうしてに答えることが出来ぬことは、もう充分に知っているし、答えてもらう必要はない。その言葉は、もう<sup>B</sup>論理は形だけで感情しか残されていない。

だが、本人の私だって、どうして、おれは

C

と思うことがあるのだ。

おかしなもので、世の中には、小説や詩が書けるなんて、どんなに楽しいことでしょうね、などと羨ましがな顔をする人もあるが、楽しんで書いていられるだけなら、私は、すでに自分の家の本棚を埋めるぐらいの小説や詩を書いているだろう。それは決して、楽しいだけのものではない。もちろん、全然、楽しくないと言ってもウソになるが。

ゲーテのように、

ア  
フカイとイカイコンとウジセキとエイシユウとが  
今、うつつとうしいオタイキの中にたれこめる

と書きたい気分の中で、くだらない、人を笑わせるような文章を書かねばならぬ時も、作家となれば、持たねばならぬこともあるのだ。そして、時には、小説が書けなくなり、行きづまりを感じて自殺した人間が、何人もいるくらいなのだ。D 芥川龍之介も牧野信一も、そうした人たちであった。

芥川の名前は、今でも多くの人が知っていよう。牧野信一という作家の名前は、あまり知られておらぬようだが、私は、お前たち娘どもが、日本の小説などを読む年頃になったら、ぜひ思い出してもらいたいものだと思っている。その頃には、今よりも、もっと忘れ去られているかも知れないが、それは日本文学にとって悲しいことだ。彼は、『ゼーロン』とか『吊籠と月光』とか『歌える日まで』などという、短いが、三十年たっても、みずみずしさを失わない日本語の小説を書いた。おやおや、どうも、話が脱線しはじめた。何しろ、牧野信一が自殺したのが、今の私の年齢であることを考えていたりしたものであるから、つい話が彼の方へ行ってしまったらしい。

私は、自分でも、どうして作家なんてものになったのか、とそう思うことがあると書いたのであった。それには、そういう理由があるのだ。私は、気むずかしい顔をしていることが多くなったために、四女の美樹に、すっかり嫌われてしまっ、くさっているのだ。

時折り、原稿を書く筆が進まなくなった時、家の中で遊んでいる、ピキこと、二歳の美樹を抱きあげる。すると、この末娘は、私の腕の中で、手足をバタバタさせて、なんと

「タスケテー」

と叫ぶのである。まわりの人間は、ヒゲのせいではありませんか、と私に慰め顔をするが、父親の私には、理由はちゃんとわかるのだ。外から帰って来て、アパートの中庭で遊んでいる美樹を抱いてやろうとして、タスケテクレーと叫ばれ、実



の父親の私が誘拐犯と疑われ、一一〇番に電話をかけられそうになるとは、困ったを通りこして、腹立たしい。

「ママはスキ？」

と私は美樹に言う。

「アン」

と美樹は答える。うんのことだ。

「パパは」

「キライー」

いやはや、何ともハッキリしたものいいであることか。私は、あせる。

「パパのところにいらいっしやい」

私は、これ以上ニコニコしたら、顔が空中分解するかも知れぬほど、せいっぱいニコニコして手をさし出す。

「ダメヨー」

美樹は、私の手をたたく。ああ何と恩知らずの娘であることか。

私は、時たま手をさし出してもダメだということを知っているので、なるべく時間を作り、ゴキゲンを取ってやろうと思って、何回か、中庭に連れて行ってやったり、美樹の好きなブランコにのせてやったりもした。私はブランコを押してやった。少しくたびれかけて、そのまま立っていたら、美樹のやつは、

「そら、ガンバッター」

とぬかした。父が娘に好かれるためには、これほど苦勞せねばならぬものであろうかと、私はためいきをついた。

私は、ものを書く人間が、家庭の中で嫌われものになりながらも、それでも書かねばならぬ、その悲哀を、いったい誰が知ることが出来るであろうかと思う。

文学とは、人生の中ほどで、ふと人間の迷いこむ迷路である。私は、そんな風に文学を思う。人間は、情熱にかられて、その迷路にさそいこまれる。そもそも、この情熱というのがEくせものだ。人生という、何をしてもいい、ひろびろとした世界で、人間に自由を失わせ、一つのことや一つの人間にしばらくつけるもの、つまり迷路の壁のように一つの道に誘いこま

せるものは、この情熱というやつ姿を変えたものだ。人類の半数は女性だというのに、その中のたった一人の女性にとらわれて、他の何百という女性のことを考えられなくなるのも、この情熱というやつのおかげだ。他に何でもやることがあり、やろうと思えば自由にやれるのに、一つのことから離れられぬというのは、それに情熱をもやしているからだ。子供時代、遊びがつまらなくなると、「イチぬけた」と、さっさと家に帰ったものだが、文学へのとらわれは、そんな呪文で、簡単にとけそうもない。

いったい、私は、いつから、この文学の迷路にまよいこんだのだろうか。

(なだいなだ『娘の学校』より)

\* 出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 ア～オのカタカナで示した語の傍線部と同じ漢字を含むものを、それぞれ後の1～4の中から1つ選びなさい。

ア フカ|イ

1 級友とのカイコウ  
3 役員カイギ

2 カイテキな空間  
4 家のカイソウ

イ カイ|コン

1 積年のウラミ  
3 手相のウラナイ

2 コン色の制服  
4 努力とコンキ

ウ ジ|セキ

1 指定のザセキ  
3 評価とセイセキ

2 結婚とニュウセキ  
4 重いセキニン

エ アイシ|ユウ

1 シュウシヨク活動  
3 シュウソの声

2 シュウリヨウ証書  
4 シュウカン天気

オ タイ|キ

1 祭のタイコ  
3 前進とコウタイ

2 劇のダイホン  
4 競技タイカイ

問2 傍線部A「パパは、どうして、本など書くような人間になったの」のどうしては、どのような意味で使われていると  
作者は言っていますか。最も適するものを、次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- 1 感動
- 2 反語
- 3 方法
- 4 理由

問3 傍線部B「論理は形だけで感情しか残されていない」ことを筆者はどのように感じていますか。最も適するものを、  
次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- 1 娘に理屈で説明できず、割り切れない気持ちが残る。
- 2 娘の感情をくみ取りきれずに、悲しい気持ちになる。
- 3 娘の質問の本質が自分でも分からず、混乱している。
- 4 娘の質問の意味が理解できず、残念な気持ちになる。

問 4 空欄Cに、最も適する文を、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 作家になってよかったと認めないのだろう
- 2 作家などというものに、なっちまったのだろう
- 3 父親などというものに、なっちまったのだろう
- 4 父親になってよかったと認めないのだろう

問 5 傍線部D「芥川龍之介」の作品以外のものを、次の1～5の中から一つえらびなさい。

- 1 雪国
- 2 鼻
- 3 羅生門
- 4 蜘蛛の糸
- 5 河童

問 6 傍線部E「くせものだ」とありますが、筆者はなぜ情熱をくせものと言っているのですか。その理由を「迷路」という言葉を含めて三十字以内で述べなさい。